

特集 故佐藤和彦先生を偲ぶ

昨年（二〇〇六年）五月十三日、史学科教授佐藤和彦先生が急逝されました。史学科に属するすべての教員、学生にとって大きな衝撃であり、悲しみでした。

佐藤先生の帝京大学での在任期間は決して長いものではありませんでしたが、その間に向学心旺盛な多くの学生を熱心に指導され、史学科の発展に多大の寄与をなさいました。

『帝京史学』では、先生への感謝の思いをこめて追悼特集を組むこととし、主として先生の本学での教育活動を振り返る形で、先生のご業績を皆様に紹介させていただくことといたしました。

本特集を故佐藤和彦先生のご霊前に捧げますとともに、本誌編集委員の依頼に応え、本特集へ玉稿をお寄せいただいた各位に心より御礼を申し上げます。

（編集委員）

二〇〇六年五月十七日に執り行われました故佐藤和彦先生の告別式に際し、帝京大学文学部史学科を代表して菅野則子教授が弔辞を捧げられました。以下、その文面を紹介させていただきます。

(編集委員)

弔辞

五月十三日六時半ごろ帰宅、着替えをする間もなく電話のベルが鳴りました。学校からでした。受話器の向こうから「佐藤先生がお亡くなりになりました」と。思わず「えーっ」と自分でも驚いたほどの大声を発していました。二日前の十一日の午後、先生が私の研究室をノックされ「金曜日の学科会議に欠席します。実は土曜日、和歌山でシンポジウムがあるけれど、当日出発は身体に無理だから前日に現地に入りたので」と。少々時間がありとのことでしたのでコーヒーをいれて差し上げ、あれこれと歓談したばかりでした。「倒れてから、丁度二年、このあいだ検診に行ったら順調に恢復、あと一年で三年が過ぎる、そうなれば無罪放免、もつといろいろなことができる」と悦んでおられました。「和歌山に行かれるのですしたら、のんびり白浜温泉にでも…」と申し上げると「今は、温泉もダメなんだよね。あと一年たてば…」と、早くもう一年過ぎるのを心待ちにされておられました。二十分ほど経った頃、学生の来室で席を立たれたとき「では、お元気で行ってらっしゃいませ」と

の言に「ハイ」と元気なお声の返事でのお別れをしたばかりでしたのに。

五月十五日の講義の最後に、佐藤先生のことを話しましたら、教室中驚きのざわめき、終了後、大勢の学生が教卓を取り囲み「僕、佐藤先生の授業をいっぱい取っているのに……」と、とても信じられない、残念だという顔顔。

先生が帝京大学に赴任されたのは二〇〇一年度からでした。以来、学生は勿論のこと、周囲の教職員の方々にも気さくに語りかけられ、先生の周りはいつも和やかな空気に包まれていました。このような先生でいらっしゃいましたから、演習の受講生も多く、先生のご指導の許で卒業論文を書きたいという学生は毎年大勢おられます。昨日も卒論ゼミの学生が集い話しておりました。本当はこれからじっくり本格的なご指導を仰げるのを楽しみにしていたのですが、それがかなわなくなりました。本日はこれからじっくり本格的なご指導を仰げるのを楽しみに書き上げることが、先生への供養になるから、そのつもりで頑張りますと。その力強い言葉の中に

先生の日頃からのご指導の賜が根付いているのを確信いたしました。また、学科会議でのさりげない一言が印象的でした。話があまり問題なくどんどん流れ去っていくようなとき、それでいいのでしょうかとでもいうように、ちよつと立ち止まらせるような一言、また、議論が混乱しているようなときに、石を投げるかのような大胆な発言、それらを要所要所でさりげなく発せられるので、話は深められたり、議論に軌道修正が施されるなど引き締まった会議の終了を迎えることも度々でした。

また、時には怒りにも似た気持ちも吐露されることもありました。当局から招集がかかり指定通り集合待機している時、かなり時間が過ぎた頃、係の所へ行き「時間がこんなに過ぎていくけれど、まだ始まらないのですか、

こんなに待たせるのなら、招集時間を遅らせるべきでしょう。そのことをきちんと上に言ってください」と。当局に対して「待つ」ことに慣れっことになっている多くの教職員にとってはちょっとした清涼剤でした。この時の一言は心なしかよりよい効を奏しつつあるように思われる此頃です。

帝京大学での五年余り、先生にとっていろいろ大変なことがおありだったことと思いますが、学校そして史学科にとりまして、また学生・教職員にとりましてでもトータルモ貴重な存在でいらっしやいました。

でももう先生はおられない。時折の「お茶の一服」も想い出となってしまう。けれども、私の中から「アー疲れた一服」なんて部屋をノックされるようなお姿を消し去ることはできません。

二〇〇六年五月十七日

帝京大学史学科を代表して

菅野 則子

史学科での在任中、佐藤和彦先生は学生たちを熱心に指導され、その結果、彼らの中からは他大の大学院へと進み、歴史学の研鑽を続ける者も多く現れました。以下に掲げます五つの文章は、佐藤先生からの学恩をこうむった諸氏に佐藤先生との思い出を綴っていただいたものです。

(編集委員)

佐藤和彦先生の思い出

藤 井 崇

僕が帝京大学文学部史学科で佐藤和彦先生にお会いしたのは、卒業論文作成のための授業であった。

その日、休み明けの授業の初日であったためか、僕以外には受講生が来ておらず、また、教室の鍵も開いていなかった。

しばらく教室の前で待っていると、上背と貫禄のある先生が笑みをたたえつつ近づいてこられた。佐藤和彦先生であった。

帝京大学に赴任されたばかりであった先生は、研究室や学生課の位置関係がまだよくわからないということであつたので、僕は急いで学生課に鍵をとりいき、教室を開け、はじめて先生とお話した。

先生に問われるまま、僕は臆面もなく卒業論文の構成について述べ、大学院へも進学したいなどといったことを話した。

先生は「ホウ、ホウ」と相槌をうたれつつ「ではたくさん勉強しないとなあ」と言われていた。翌週の授業からは一〇人前後の学生が集まり、順調に授業が進み、僕も拙いながらも卒業論文の構想報告などをさせていた。

僕はそのころ、卒業論文の作成と同時並行で、大学院入試の準備をしていた。幸い僕には大学院へ進み、日本史の研究を継続したいことを願う同志が二人いた。

それぞれ卒業論文ゼミは異なっていたが、一人は僕と同様中世史の専門で、いま一人は近世を専攻する男であつた。

彼らと現在にいたるまで研究仲間兼友達関係となつたのは、丁度そのころで、そのきっかけは、その二人の希望するそれぞれの大学院入試に古文書科目があり、それに備え、佐藤先生が古文書読解を放課後に鍛えてくださるということ、その会に参加を誘われたことによる。

やがてその時間がきて、佐藤先生の研究室へ行くと、部屋は本棚の前にダンボールが山積みとなっており、先生のお顔がみえなかつた。

その隙間から「藤井君よく来たなあ」というお声がして、以後、やや気負いすぎなくらいに向学心に燃えた三

名に対し、古文書の課外授業が始まった。

先生がテキストにされたのは『東寺百合文書』であった。時間がはじまると、先生はまず缶ジュースを四本買
い求めてくるようにとおっしゃるのが常であった。網野善彦さんの一連の研究を尊敬され、かつ批判もされてい
た先生は、当時流行していた「アミノ酸」入りの清涼飲料水がお好みで、これを飲んで「網野さんのような立派
な研究者になれよ！」などとといわれ、硬くなっていった我々の緊張をほぐそうとつとめられていた。

そうしたこともあって、単純な我々はすぐに無礼なほどに打ち解け、その時間は常に明るなものとなった。

また、「まだ引越しが終わってないんだよ」ということで、我々はダンボール箱を机の代わりとし、その上で
文書のコピーをひろげ、格闘していた。

古文書は南北朝時代のもが多く選ばれ、先生のご専門であった矢野莊などの莊園関係の文書や、後醍醐天皇
や足利尊氏、そして悪党楠木正成や佐々木道誉といった中世の著名人達が登場する文書が多かった。

理想と現実は異なり、我々三名は口ほどにもなく実力不足で、ごちそうになっているジュースを飲み干し終わ
っても一枚の文書すら読み終わらないことがしばしばであった。

大抵は「まだ読めないの？」といったようなことばかりいわれていたが、たまに誰かがスラスラと読めるよう
なことがあると、嬉しそうに「ホホウ！やるねえ！」などといわれ、僕などが、ときとして、よせばよいの
に得意になって稚拙な解説を試みようとする、「藤井君もいうねえ」と苦笑されていた。

今にして思えば、その時間、我々三人は先生の用意された大体二枚か三枚の古文書を読んでいたが、その組み
合わせは絶妙で、前述したような後醍醐天皇や足利尊氏といったような権力者が発給したような文書と、矢野莊

のような莊園に住む、名も無き百姓達が書いたような文書の二種類からなっていた。

特に先生は後者の文書を中世社会の人々が生活する場、すなわち「在地」の世界で作成された文書ということで、「在地側の文書」とか「在地の文書」と呼称しておられた。

「在地の文書」は、中世のかな文字で書かれていることが多く、あまり現代とかわらない漢字で書かれた権力者側の文書よりも難解であって、毎度我々三人は頭をかかえていた。

ところで、日本中世史の学会ではつとに有名なことであるが、先生はある日本プロ野球の某在京球団がご鼻眞であった。

課外の古文書の時間、怖いもの知らずの畏友が、我々の実力不足を棚に上げ、前夜その球団が敗北したせいか、いつもより難しい「在地の文書」ですねえなどと言うと、きまって「馬鹿言っちゃいけない」と呵呵大笑されていた。

失礼ながら僕もその畏友の邪推に少々賛同していたが、しかし、今思えば、当然それは単なるきっかけであって、比較的読み易い権力者側の文書を読むばかりでなく難しい「在地の文書」を読まなければ実力はつかないし、また、研究が権力者側のみに偏ってはならない、という先生の強烈なメッセージであったのである。

先生はこのように「在地の・・・」といった言葉を好んで口にのぼせられていた。ここで踏み込んで述べる余裕はないが、先生の輝かしい研究業績からいっても、在地側に重きを置いた研究者であったことは紛れもない。

であるが故に、先生が、世上、日本プロ野球球界のなかで、あり様が権力的といわれている、その某在京球団のファンであることに、僕らはやや矛盾を感じていた（当然趣味は趣味、研究は研究ということではあろうが）。

先生もおそらくそのことについては少々苦慮されていたように思われる。先生は、休憩時間などに、時折、実はその某球団は、権力的なスター選手の引き抜きだけではなく、二軍の若い選手をちゃんと育てているんだよ……といったような、今思い出しても苦しい自己弁護を、問われもしていないのによくつぶやいておられた。

ただ、先生は確かに在地側に重きを置いた研究者ではあったが、明らかに後醍醐天皇や足利尊氏といった権力者にも魅力を感じておられた。しかし、あくまで権力そのものというよりは権力者個人についてではあったが。

なかでも後醍醐天皇に関するエピソードについては実に楽しみに語っておられた。足利尊氏についてもそうであるが、彼らの骨太で、ときとして周囲から誤解されるようなダイナミックな生き様に、人間としての魅力を感じておられたのであるうと思われる。

これはおそらく某球団の往年の象徴的スター選手（後、監督）にも共通することなのであろう。

ここからして、逆に研究が在地側のみにも偏ってはいけないと思っておられたのか否かは定かではなく、多分そう思っておられた可能性は低いと思われるが、しかし、要するに文書に登場する有名・無名な人物すべてに魅力を感じ、彼らについて大切に分析すべきである、との美学をお持ちであったということは読み取ってもさほどのお叱りはうけないであろうと思われる。

その後、僕も含めてその課外の古文書の特訓をうけた三人は別々の大学院へ進学した。研究会その他で日頃から頻繁に会ってはいるのだが、年末には帝京大学周辺にあつまり、ささやかながらも忘年会を開き、先生にもお

忙しい中ご出席いただき、先生の好物である「薩摩揚」などを食べながら一年間の研究成果をご報告するのが恒例であった。

そういった場で、僕らが大学院でこのような経験をしたとか、興味深い研究ができそうだとか、研究論文が雑誌に掲載された、などといったようなことを報告すると（内容の巧拙は問わず）大変嬉しそうにしておられ、我々にとつても、そうした時間は研究を続けてゆくうえでの一つの励みでもあった。

当然、これから幾度もそうした場面を向かえることができると思っていたが、今回の突然の悲しい出来事によってそれは不可能なこととなった。

正直なところ、今に至るまで、先生にはもう会えることはないということに、あまり実感が無い。「ホウ！ホウ！」という声は今にも聞こえてきそうである。

僕は遂に先生のご壮健であつたうちに立派な研究者となることはできず、研究者として対等に近い立場で、本格的に先生と研究上の議論をすることなどは到底できなかつた。そのことはとても残念である。

ただ、先生には膨大な著書がある。落ち込んだときや、研究が行き詰ったとき、或いは慢心したとき、先生の本を開き、読み、初心に帰って研究し直し、佐藤先生の教えをうけた者として恥ずかしくない研究をしていきたいと思つている。

佐藤先生、短い間でしたが、本当に、ありがとうございました。

佐藤和彦先生の思い出

徳 永 裕 之

佐藤和彦先生との出会いは、二〇〇〇年の四月、私が帝京大学の四年生のときでした。その前年度から藤木久志先生のご指導のもとで、山本英貴君と中世古文書の勉強会をしていました。しかし、藤木先生が今年は授業が忙しいので勉強会は佐藤先生にお願いしてくださいと仰られ、佐藤先生にお電話をされ、すぐに藤木先生の研究室に佐藤先生がいらっしゃられ、そこではじめてお会いしました。

先生は研究室に來られて、突然、古文書の勉強会を依頼されて困惑されていたようですが、すぐに「じゃ、やりましょう。」と仰っていただき、ご指導を仰ぐことになりました。第一回目に行くとは藤井崇君が来ており、これで学生は三人になり、六号館の三階にあった先生の研究室で、週一回（火曜日、五時間目終了後）の勉強会が開かれることに決まりました。その当時の研究室には学芸大学からのダンボールが山積みになっており、先生の机以外に机を置くスペースもない状況で、勉強会をするにもスペースがなく、どうしたものかと思いました。机に代用ができるものがないかと見渡すと、山積みになっているダンボールに目が留まり、これを積みば机になる

んじゃないかと言う事になりました。その後、毎回、ダンボールを二、三個積み上げて簡易机を作り、勉強がはじまりました。

勉強会の内容は、中世古文書の写真を筆耕するというものでした。いまだに古文書の解説は苦手なところがありますが、あの当時は知らない言葉があきらかに多すぎました。例えば「供僧（グソウ）」、「交名（キョウミヨウ）」などといった中世史を勉強する人間にとっては常識の単語も、最初に見たときは「ともそうですか?」、そなえそうですか?」などと読んでみたり、「こうめいですか?」と読んでみたりしました。今思い出しても恥ずかしいことです。そういう時、佐藤先生は「へえー、徳永君はそういう風に読むんだー。君は変わった読み方をするんだねー。僕はそうは読まないだけだねー。君はグソウって言葉を聞いたことありませんか?」などと仰られて、笑っておられました。自分の未熟さを日々痛感するような会でしたが、非常に楽しい思い出です。

帝京大学卒業後、私は佐藤先生が兼任講師としていらしていた専修大学大学院に進学し、修士課程在籍の二年間、指導教授としてご指導をいただきました。大学院ゼミにおいては、毎回、授業の最初に古文書の写真を配られ、それを筆耕し、その後、史料の輪読や各個人の研究報告を行いました。ゼミには、先生の人柄を慕って他大学の院生なども参加しており、活気があふれていました。ゼミの中で、「東寺百合文書」の史料が読めないときなどは、当時流行していたアミノ酸飲料を指されて、「徳永君、アミノ酸を飲まないから、東寺文書が読めないんだよ。」と、東寺領荘園の研究者である網野善彦さんと、アミノ酸飲料をかけた冗談なども仰られていました。また、先生は大の読売ジャイアンツのファンで、ジャイアンツが負けた翌日のゼミには、難解な古文書の写真が出されて、私たち院生は四苦八苦していました。そうしたことも今では良き思い出のひとつとなっております。

大学院に入学後、悪党研究会、勘仲記の会という佐藤先生を中心とした会にも参加させていただきました。これらは大学の枠組みを越えた研究会であり、佐藤先生をはじめ諸先生・先輩方に時には厳しく、時には優しくご指導を賜りました。研究会後の飲み会などにも、先生はほぼ毎回参加されていました。飲み会の席では先生の学生時代のお話や、学問の事や、テレビドラマについてなど楽しいお話を聞かせていただきました。また、一人暮らしの私の食生活も気にしていただき、「一人暮らしなんだから、こういうところでしたっけ野菜を食べなさい。」とよく仰られていました。先生と最後にご一緒した飲み会の席では、後輩への指導の仕方や、生活態度などについて、いろいろとご指導をいただき、私の事を気遣っていただきました。

また、歴史学研究会中世史部会に参加するなかで、佐藤先生の大きさを改めて気付かされました。特に歴研大会中世史部会でのご発言は、大会の議論の流れを作ったり、来年度に向けての問題提起をするといった重要な役割を担われていました。事前の準備報告会にも、二度、三度とお越しになられ、大会報告の方向性について発言をされてきました。和歌山で亡くなられた当日も、大会準備報告の内容について、いろいろと私に質問されていました。歴史学研究会に対する熱い想いは、今でも伝わってくる気がします。

佐藤先生との突然のお別れの日は、二〇〇六年五月一三日（土曜日）、和歌山県立図書館（きのくに志学館）において、「小山精憲氏追悼フォーラム」が行われた日でした。当日、私もそのシンポジウムに参加するため、早めに到着して図書館の入口で待っておりました。佐藤先生が県立図書館に到着されたのは一二時三〇分頃でした。時間があつたので、せっかくだから図書館の中を見学しようと誘われて、先生とご一緒に図書館に行きまし

た。その後、そろそろ時間が来たと思って先生の所に行くと、真剣なまなざしで厚い本を読まれていました。私は何の本であるか気になり、書架に返されるときにちらりと背表紙を見てみると、先生のふるさとの地名辞典『愛知県の名』(平凡社刊)でした。一三時過ぎからシンポジウムが開催され、シンポジウムでは木村茂光氏等の報告があり、一六時ごろに質疑の時間となりました。そこで質問者の二人目として、佐藤先生が質問に立たれました。ご発言の内容は、本号の『帝京史学』に掲載されるということですが、最期の最期まで研究者であり、教育者としてのご発言でした。質問を終えられて、イスに座られてから、ほんの数秒後であったと思います。私の目の前で、先生が眠るように横に倒られました。後ろの席にいた私が、とっさに手を差し出して先生をお支えたのですが、すでに意識はなかったようです。救急車が来る間に会場で心臓マッサージ等も行いましたが、日赤和歌山病院に搬送されたときにはすでに手遅れのようにでした。病院において、死亡が確認されたのは十七時四十三分のことでした。あまりにも突然の出来事でした。その日もいつものようにお会いして、いつものように会が終わったら懇親会にでも行こうかと、声をかけてくださると思っていた矢先にこのような形になるとは、誰もが信じられない光景でした。最後に読まれた本が、奇しくも先生のふるさとの地名辞典であったことは、先生ご自身、何かを感じられたのかも知れません。

現在、私は専修大学大学院文学研究科歴史学専攻博士後期課程(三年)に在籍しております。佐藤先生の大学の後輩にあたる太田順三先生のもとで、室町時代の守護権力と地域社会について勉強しています。論文としては、『備中守護家細川氏の守護代と内奉行』(『専修史学』三八号、二〇〇五)、「備中南部の地域社会と氏寺」(悪党研

研究会編『悪党と内乱』岩田書院、二〇〇五の二本を発表いたしました。帝京大学を卒業して六年以上も勉強を続け、多少なりとも論文を発表することができたのは、大学時代に佐藤先生のご指導を受ける機会を得たことであります。改めてその学恩の大きさに、感謝の気持ちがあふれてきます。こうした学恩に報いられる様、今後とも勉学に励んでいきたいと思っております。また専修大学大学院には、帝京大学佐藤ゼミから進学した院生が数名おります。彼らとともに、相互に成長していける環境を作っていきたいと思っております。

先生のお墓は神奈川県川崎市多摩区南生田の「春秋苑」という霊園に決まりました。その霊園には、佐藤先生の先生でもあり、一番に尊敬される西岡虎之助先生も眠られています。きっと、今頃は西岡先生といつもの笑顔で議論をされているのではないかと思います。佐藤先生、これからも天国から私たちの成長を見守っていてください。

佐藤和彦先生、これまでのご指導ほんとうにありがとうございました。

佐藤和彦先生の思い出

山本英貴

佐藤和彦先生が帝京大学に史学科教員として赴任されたのは二〇〇〇年四月。私が同学科四年生の時である。私は当時、同期のT君とともに、同じく史学科の教員であった藤木久志先生のところで週一回、そのご迷惑も顧みず、お昼休みに研究室を訪問し、中世文書の読み方について、色々と教わっていた。しかし、今でこそ理解しているつもりだが、くずし字は点数をこなさないと、なかなか読む力がつかない。この点については、藤木先生よりたびたびご指摘を受け、最終的に、さらに古文書を読む時間を増やさねばならないとの結論に至った。ある日、藤木先生は何時も通り古文書を読んでいた我々に、君たちは佐藤和彦先生のところでも中世文書を教わった方がよいと仰られた。そして我々を、佐藤先生にご紹介くださり、古文書読解の件をお願いしたところ、佐藤先生は「勉強熱心な学生が多いのはよいこと」と言われ、その場ですべてを快諾くださった。これにより、我々（佐藤先生の卒論ゼミ生であったF君も加わり、最終的に三名）は佐藤先生のもとで以後、中世文書の読み方を教わることになる。これが、私と佐藤先生の出会いであった。

その後、私は学部卒業までの一年間、佐藤先生に中世文書の読み方について、色々と教えていただいた。当然ながら、佐藤先生の古文書講義は藤木先生と同様、授業時のものではなく、毎週火曜日の五限が終了し、夕方六時よりおよそ一時間行われた。その際、とりわけ印象深いのは、研究室の殆どのスペースを占めた荷解きされないう書籍入りの段ボール箱であった。佐藤先生は赴任当初、六号館に研究室を持たれていた。六号館は、大学創立の初期から存在する建物である。したがって、後に佐藤先生が研究室をかまえられた一〇号館と比べ、室内はとも狭かった。そこに、大量の段ボール箱が所狭しと積み上げられていたのである。研究室には、佐藤先生を含めて、四名が限界であった。

佐藤先生の古文書講義は、先生が五限の講義を終え、研究室に戻られてから開始となるが、我々には受講前、まずするべきことがあった。すなわち、一名が先生よりお代をいただき、人数分の飲み物を購入する（当時、佐藤先生はお茶のほか、プロ野球西武ライオンズの松坂大輔がCMに起用されていた某スポーツ飲料を好んで飲まれていた）。他の二名はその間、研究室に山積みされていた段ボール箱を二・三個おろし、それを積み重ねて簡易の机を作っていた。椅子については、周囲に置いてあった段ボール箱を利用した。

ついで講義は、先生が中世文書のコピー一点を各人に配り、それぞれがおよそ一〇分から一五分、原稿用紙に文書を筆写するところから始まる。様々な文書を読ませていただいたので、そのすべてを記憶しているわけではないが、豊臣秀吉が寺社に宛てた朱印状や吉川家文書などが印象に残っている。そして、一名ずつ筆写した箇所を一行から二行、自分がくずし字を如何に読んだかを報告し、間違った箇所があれば、他の二名が答える。全員不正解の場合は、先生のご助言のもと、各人が考え、不詳な点については、先生が正解を教えてくださいました。そ

の時間はおよそ三〇分。残りの時間は、先生が文書の発給者・受取者、および文書が発給された事由・時代背景について、丁寧な解説してくださった。なお、私は現在、中世史ではなく近世史を専攻する。一般的に、近世は全国の市町村に膨大な村方史料が存在し、一点の文書に対する読み込みが中世に比べ、浅くなりがちである。しかし、文献史学を専攻する以上、文書の内容・それが発給された事由を一点ずつ、正確に把握することについて、時代は関係ない。思い返せば、私は歴史学を専攻する上での常識一般を、佐藤先生の古文書講義により学んだのであろう。

また、佐藤先生には古文書講義の終了後、何度か飲みに来て行っていた。これは、当時より飲み会が大好きであったT君が、色々とセッティング（この方面に関し、私とF君は、基本的に頭が回らなかった）してくれたお陰である。飲み会は、前期・後期の終了時、聖蹟桜ヶ丘の某飲み屋において行われた。その際、佐藤先生は学生時代のことや東京学芸大学における教員生活のことなどをお話くだされ、非常に楽しい一時でありました。

最後に、私は学部卒業後、専攻が近世史であるため、研究会などにおいて、佐藤先生とお会いする機会は殆どなくなった。お会いするのは、私が用事で大学に行った際、先生の研究室を訪ねた時ぐらいである。その折、佐藤先生は決まって、「どうして山本君がいるんだい？、古文書講義はないよ」と仰られた。そして、近況をお話して、そのままお別れした。また最近、私の所属大学院の後輩が、研究会において佐藤先生とお会いた際、先生は「山本君は元気でやっているか？」と仰られたと言う。その話をお聞きし、先生のもとへ挨拶に行こうと考えたが、私の怠慢のため、お伺いできなかつた。そして、突然の訃報に接した。今後は、この不明を胸に、研究

に對して、これまで以上に邁進したい。そして佐藤先生の学恩に少しでも報いたたいと考えています。
ここに先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

佐藤和彦先生の思い出

専修大学大学院修士課程 角野安徳

佐藤和彦先生との出会いは、大学二年生のときです。なんとなく歴史学を学びたいと思いつつ大学に入学したのですが、どの時代について何を学ぼうかという具体的な目標を決めかねていた時期でした。そのため中世に関する講義を取りつつも近世・近現代に関する講義や古文書読解を聴講する等していました。その頃は特に佐藤先生を意識することも無く先生の講義を受けておりました。真面目に受けていたかというところは否であったと思います。自分から積極的佐藤先生に接し始めたのは、大学三年生になり、卒業論文のテーマについてなんとなく考え始めた時期でした。私は自分の地元を素材にして何とか卒論をまとめたいと考え県史等を読み近世に対して中世の扱いが少ないことから何かができるのではないかと考え中世を主な題材にしようと決めました。卒論の担当教授選択についてもそれまで比較的多く講義を取っていたことからお願いしました。それから佐藤先生の授業で自分の報告について相談をするようになりましたが、それまでの積み重ねを怠っていた私は、まず何から

手をつけてよいか手探りの状態でした。何度か自分の考えを報告したのですがその最中、自分でも何を言っているのか疑問が出てくるほど出来の悪いものばかりでした。そんな内容の報告でも静かに座りメモを取りながら佐藤先生は真摯に聞いて下さいました。報告後は最初に内容をまとめ次に疑問点を発言されましたが、その要点のまとめ方は私の用意した史資料から読み取り報告以上のまとめ方をされていました。疑問点を発言され、それに対して十分な回答が出来なかつた時なども不機嫌な態度をまったく見せず対応してくれました。さらにその疑問を解決するためにどのような史資料に当たればよいか指導をしてくれました。講義が終わった後も研究室までの道すがら自分の話を聞いていただいたことが何度かありました。このようなことを繰り返しながら内容は不十分なものでしたが何とか形だけでも卒論を仕上げる事が出来たのは佐藤先生のお蔭であります。この卒論の作成中にもう少しだけ勉強してみたいと思つたことが大学院へ進学したきっかけでした。卒論の担当でもありました佐藤先生にその旨を相談すると院入試について勉強の仕方など気軽に答えてくれました。また現在通っている専修大学を紹介していただいたのもこの時でした。さらに自分からお願ひした院入試に対しての模擬面接にも応じて下さいました。この模擬面接でそれまで多数の生徒に対して接してきた佐藤先生とは違った雰囲気を感じました。普段は笑みを絶やさぬ優しい雰囲気を出していた先生でしたが、この時は違いました。一方で接した模擬面接では、それまで感じる事の出来なかつた厳しい空気を感じることが出来ました。今思いますがそれは院入試を受ける私に対しての配慮では、なかつたかと思ひます。院入試の筆記試験についてはある程度自分自身で何とか進める事が出来ますが、面接に関しては経験というものが大事であつたと思ひます。あの厳しい空気の面接を経験してある程度の覚悟を持つて臨んでいなければ後の面接試験で必ず失敗していただであ

うと容易に想像できません。大学生生活の間に於いては後半にならないと佐藤先生との個人的な思い出は余りありません。しかし院生になってからは少し違いました。

専修大学院に通うようになり院生生活を始めた私でありました。そこで帝京大学の先輩である徳永先輩を佐藤先生から紹介されていたこともあり、他の大学出身ではありましたが専修大学に慣れるのは比較的早かったと思います。これは共通の先生を通じて知り合ったからこそだと言えます。他大学の講義も受けることが可能ということで中央大学の講義に参加している時期もありましたが、その際に帝京大学が近いということもあり時間を見つけては研究室へ伺っていました。自分自身の報告についてうまくまとめを進めることができないような時、佐藤先生に話を聞いてもらいたい様々なアドバイスを受けておりました。今考えるとこれはとても貴重な時間を過ごさせていただいたのではないのでしょうか。そうしている間に先生や徳永さんの薦めもあって、悪党研究会へ顔を出し始めました。そこは佐藤先生を中心とした集まりといってもよく、自然とその会の参加者の誰もが佐藤先生を中心としているように感じました。私自身の報告を何度か悪党研究会で報告させていただきました。まよりの良くない報告をさせていただきましたがそこでも帝京大学生時代のように報告後に真っ先に指導をいただいております。また緊張し、他の質問者の意図を的確に把握できていない場合に助け舟を出していただいたことが度々ありました。先生は研究会が終わった後に皆で歴史について、または世間話を近くの飲み屋で話し合うことがとても楽しみであったように思います。私が参加し始めた時期は一度体調を崩された後、ということもあり健康を考えて本格的にアルコール類を飲むようなことはありませんでしたがその場を楽しく過ごしておられるように見えました。私が佐藤先生と最後にお会いしたのも悪党研究会でした。その日の報告担当は私でありました。やは

りいつものように的を射ない報告を行ってしまい、自分の成長を実感できない不甲斐無い内容でありましたが、ここでもいつものように真っ先に佐藤先生が報告後に発言をされました。ただいつもと少し違うことがありました。私の報告が不甲斐無いということもあったのですが、一言前置きをして少し厳しい内容のアドバイスをいただきました。その後の定例になっております飲み会の席上では今までで一番良かった内容とお言葉をいただきました。現時点ではまだまだ内容的には雑ではあるがうまくまとめていくと良いものになる、という内容のお言葉でした。そういった言葉一つがとても励みになり、それは今でもそうであります。

最後に私の現在の研究について少し述べたいと思います。基本的には卒論でとり扱った中世瀬戸内海地域の研究という大きなものがテーマとしてあります。それをさらに詳しく見ていくために、まず特定の地域を見ていくとしています。香川県の西にある仁尾という地域です。この地域には中世後期において神人等が存在し広く交流がもたれ、また地域の内においても神人と在地にある賀茂神社の関係等といった興味深い事例があります。「中世瀬戸内海地域における基礎的研究 仁尾地域を例に―」（仮）といったテーマで現在は進めていこうと考えております。ただ発展途上の部分もあるため付け加えや省く部分が出てくるかと思われませんが今は生前に佐藤先生から頂いたアドバイスを活かして自分の研究に取り組んでいきます。

心より佐藤和彦先生のご冥福をお祈りします。

忘れ得ぬ人―佐藤和彦先生を偲んで

高野 宜秀

私は歴史を本格的に学び始めて五年目を迎える。帝京大学では、尊敬する先生や頼もしい仲間たちにめぐり会えた。その中でも佐藤和彦先生との出会いは、帝大の四年間を通して一番印象深いものであった。

東京都八王子市の帝京大学を選んだ一番の理由は佐藤和彦先生に教わりたいと思ったからである。それは、一九九七（平成九）年にNHKで放送された「堂々日本史」という番組で『太平記』を三回シリーズで取り上げた時に出演していた佐藤和彦先生の考え方に興味を感じたからだ。佐藤先生ともう一人のゲスト北方謙三氏との悪党をめぐる話は、とても新鮮に思えた。それ以来私は、歴史に対して以前よりも関心を持つようになった。

帝京大学に入学し、あこがれの佐藤先生と初めてお話ししたのは、忘れもしない二〇〇二（平成一四）年六月一日（土）であった。この日は、先生の歴史環境論の講義があったのだが、ちょっと疑問に思うことがいくつかあったので、研究室を訪ねてみた。

研究室に緊張しながら入ると、先生は嫌な顔をせず迎え入れてくだされ、疑問に対する答えではなく、それを解くヒントを与えてくれた。それからは頻繁に先生の研究室に出入りするようになった。

先生の歴史をみつめる目は鋭く、民衆や悪党などの被権力者側からの考え方に大いに刺激を受けた。そして、日本中世社会の情報についての先生の見解は、卓越していた。

また、先生は日頃から私に視野を広く持ちなさいとアドバイスをしてくださっていた。これは、私の考えの中について新田氏の動向のみに注意をひきつけられ、他の足利氏や天皇側近、悪党たちの動きを見落としがちだったからである。この視野を広く持つというアドバイスは、歴史に限らずいろいろな面で役立っていると思う。

私は、群馬県出身で、新田荘のあった太田市の隣である大泉町に住んでいたためか幼い時から新田義貞に関心を持っていた。新田義貞は、群馬県民ならば誰でも知っている「上毛カルタ」の中で「歴史に名高い新田義貞」と詠われている。太田市には、新田荘関係の寺社や館跡・湧水池などが残されており、二〇〇〇（平成一二）年一月に「新田荘遺跡」として国の指定を受けた。こうした遺跡群を高校時代に見学に行っては、一眼レフカメラで撮影するのが最高の楽しみであった。

先生はその他にも、学問以外で高い感性を持ちあわせていた。それは理性とともに芸術への造詣も深かったことである。私は、趣味で写真を撮っているが、先生に撮影した写真を鑑賞してもらおうといろいろなコメントをしてくれた。先生は、写真というものが「光の芸術」ということをよく理解していた。普段は、新田荘関係の史跡や鎌倉の寺社の写真を見てもらった。私が、二〇〇五（平成一七）年の伊豆大島椿まつり写真コンクール東京都知事杯で入選した時にとっても喜んで頂いた他、二〇〇五年第五十三回群馬県写真展・第二十九回県民芸術祭参加

の第四部（ヤング部門）においてひしめく強豪を下し、第一席となる「群馬県教育長賞」・「富士フィルム賞」の二冠を初出品で頂いた時にも、「素晴らしいね」と褒めてくださった。

このように専門の勉強だけではなく、写真も鑑賞してもらいたい本当に幸せだった。先生がお亡くなりになって、これからの研究の話はもちろんのこと写真も見てもらえないのかと思うと残念でならない。先生は、「高野の写真を見ると目の保養になるからまた見せてくれい」とよく言っていた。特に二〇〇六（平成一八）年の第五十四回群馬県写真展・第三十回県民芸術祭参加の第四部で入選し、二年（二大会）連続で表彰してもらったことを伝えられないのが、まことに残念である。

現在、神奈川県川崎市多摩区東三田の専修大学大学院で上野国新田荘の構造を岩松氏との関連で追求しているが、先生の述べておられた交通や物流、情報の問題をよく検討し、私の研究に活かしていきたいと考えている。最後になるが、先生の教えを忘れず、健康に気をつけて、何事にも一生懸命に取り組んでいきたい。

二〇〇六年五月十三日、佐藤和彦先生は、きのくに志学館において開かれた「追悼フォーラム・小山靖憲の歴史学―理論と実践の歴史家―」に参加され、「コメント」を行われました。そしてその直後にお倒れになりました。以下、佐藤先生の御発言内容を紹介させていただきます。
(編集委員)

「追悼フォーラム・小山靖憲の歴史学

——理論と実践の歴史家——」における佐藤和彦先生のコメント

えー、東京から来ました佐藤です。今日は本当に小山さんの追悼フォーラム、沢山の人が、報告者もそれから準備にあたっていただいた人たちも、非常に大変だったろうと思うんですね。で、特に、えー、バスを降りたら、そこに和歌山大学の学生さんが雨の中に立っていて、会場はここですよ、ということを書いていただいて、あれなんかは、うーん、やっぱり小山さんの追悼フォーラムっていうのは、報告者の誰々、海津さんがいくらカリスマでも、一人だけではできないなあ(会場のあちこちで笑)、ああいう和歌山大学の学生さんのですね、献身的な協力もあるんだなあ、そういうようなものも、小山さんがちゃんと育ててきたんだなあ、そういうふうに思いまして、やあすばらしい会だった、と、いや、これからも討論するわけですから、会になる、と思いますね。で、

有難うございましたっていうのを、最初に一言だけ感謝をさせていただきます。

で、そこからちょっとご質問させていただきますが、えーと、まず木村さんの報告の中で、えー、小山さんが石母田さんの理論を、まあかなり基本的な点から批判され、で、それはまあ評価としてはですねえ、木村さんのおっしゃる通りだろうと思うんですが、えーしかし、石母田さんの理論の中に弱さがあったんだ、というようなところを小山さんも言ってるわけですね。その弱さっていうのは一体何であったのかっていうところが、えー今日の木村さんのご報告の中には十分に、えー展開されていなかった。多分時間が無いから端折られたんだと思うんですが、私はですね、そのところは、えー基本的に、鈴木・石母田論争というですね、平安時代を中心にして古代から中世へ歴史が展開していくとき、誰がその一番の担い手であったのかっていう、凄まじい、あの、石母田さんと鈴木良一さんとの間の批判が、相互批判があるわけですね、そこを小山さんはちゃんと捉えていて、あの、ああいう発言になったんだろうと私は思うんですが、えー、木村さんの御見解を一つお聞きしたい…、ということが一点目です。あと、先に…、私も東京まで帰る予定ですので、先に言ってしまうんですが、えー司会の山陰さん、ちょっとお許し下さい。

それで二点目の問題は、例の『莊園の世界』の問題ですね。これも木村さんが取り上げられたし、海津さんもそれから高木さんも取り上げられている。非常に重要な、小山さんの歴史観を考える時に非常に重要な作品ですね。えー問題なのは、一九七一年に和歌山大学に就職されたというところが、えー、キーポイントだと皆さんおっしゃっているわけですが、それはもう当然、あの出版がいつだっことを年譜的に追えばすぐわかるんですけども、私はですね、実は小山さんが和歌山大学に就職される二年前にですね、六九年と七〇年のときに、史料

編纂所で修業されていたという、その点を抜いてしまうと、小山さんが『莊園の世界』の中で、あれだけです。石母田さんの論を批判しながら、しかも自らの莊園というものの捉え方を明らかにされた意味がわからないだろうと思うんですね。で、なぜそんなこと言ってるかというところ、六九年・七〇年の二年間の、小山さんの史料編纂所の修業時代というのですね、一つはフィールドワークを稲垣泰彦さんにちゃんと習われた、ということですね。水田の一枚一枚、その水がどういように水掛りがあるのか、そこまで明らかにしないと、えー、調査はできないよ、ということ、稲垣さんの方法論から小山さんが学んだ、ということが一点。と、もう一つは同時に文献史料をきちっと読み込まないと、そういうフィールドが生きてこない、フィールドワークが生きてこない、それを菊池武雄先生から小山さんがその場で学んだ。そのですね、菊池さんの文献史料の批判のこわざと、そして稲垣さんのフィールドワーク、これを小山さんが学ばれて、そして七一年に和歌山大学に就職されて、それからあのすばらしい、小山さんの御仕事が始まって、というところが、御三人の御報告の中で少し不十分ではないかと思いましたが、発言させていただきました。

それから第三点目ですけど、これも特に海津さんの報告の中で、史学史というものを小山さんが非常に大事にされてる、えーそれは、小山さんの御宅に残っていた、和歌山大学での講義案、和歌山大学を中心にした講義案のリストをですね紹介してくれました。これは非常に重要な海津さんの御報告だろうと思うんですが、えーその中で、その史学史もですね、私は、小山さんは最初のときは、これは平安から鎌倉への歴史展開をどういように捉えるのか、日本の近代史学がどう捉えてきたのか、というのがテーマだったんですね。ところが、後半、もうちょっと時代が後ろになってきて、一九七四年頃、要するに和歌山に就職されて、一応その史学史の講義案

が出来上がってきたあとではですね、小山さんは自分の近代史学史の対象をですね南北朝時代に移してくるわけですね。で、しかも南北朝時代の中の南北朝正閏論争というですね、最も、日本の近代史学史を明治から現代まで考えるときに一番重要な論点ですよ、権力と研究者とそれを実際に学んだ人たちがどういう関係になるのか、というところを、小山さんがずうっと追及し始めた。そういうように、史学史で小山さんがコメントされているということはおっしゃる通りだけれども、そういうようにシフトが少し変わってきている、移動されている、というですね、これは小山さんの歴史教育というものを考えるときに、すごく重要なことになるのではないかと……。

などなど、私も、小山さんとほぼ一緒に勉強を東京でしていましたので、今日のフォーラムの、えー四人の方の御報告はですね、ふむーなるほどなあ、小山さん、こんなに勉強してたんだなあー、と半分は思いながら、まだ、小山さん、もっといろんなことやってるよ！ということを書いたかったです。以上です。すいません長くなりました。

帝京大学文学部史学科在任中の佐藤和彦先生の担当科目

二〇〇〇年度

日本史特殊講義ⅡB、日本史演習ⅡB、地方文化史、卒業論文、文章表現、歴史環境論Ⅰ、
歴史環境論Ⅰ

二〇〇一年度

日本史特殊講義ⅡA、日本史演習ⅡB、地方文化史、卒業論文、文章表現、歴史環境論Ⅰ、
歴史環境論Ⅰ

二〇〇二年度

日本史特殊講義ⅡA、日本史演習ⅡB、史籍講読Ⅰ、地方文化史、卒業論文、歴史環境論Ⅰ、
歴史環境論Ⅰ

二〇〇三年度

日本史特殊講義ⅡA、日本史演習ⅡA、日本史籍講読ⅡA、地方文化史、卒業論文、
歴史環境論Ⅰ、歴史環境論Ⅰ

二〇〇四年度

日本史特殊講義ⅡB、日本史演習ⅡB、日本史籍講読ⅡB、地方文化史、卒業論文、
歴史環境論Ⅰ、歴史環境論Ⅰ

（佐藤先生ご病気のため、秋期は、日本史特殊講義ⅡB、日本史籍講読ⅡB、地方文化史、
卒業論文を盛本昌広氏が、日本史演習ⅡB、歴史環境論Ⅰ、歴史環境論Ⅰを峰岸純夫氏が代講

された。）

二〇〇五年度

日本史特殊講義 2 C、日本史演習 2 C、日本史籍講読 2 C、地方文化史、卒業論文、

歴史環境論 1、歴史環境論 1

二〇〇六年度

日本史特殊講義 2 A、日本史演習 2 A、日本史籍講読 2 A、地方文化史、卒業論文、日本史、

日本史

（佐藤先生ご逝去のため、春期五月末以降は、日本史特殊講義 2 A、日本史籍講読 2 A、地方文化史、卒業論文、日本史を盛本昌広氏が、日本史演習 2 A、日本史を鈴木敏弘氏が代講された。）